

# みっつの“わ”

R.4. 10月号

No.7

河内長野市立長野小学校  
支援人権部発行

今週末、運動会が開催されます。心待ちにしている子どもいれば、どきどき緊張している子どもいるでしょう。しかし、子どもたちはみんな一生懸命練習してきた成果をお家の方に観てもらいたいと、精一杯演技や競技をすることと思います。最近、ビデオカメラや携帯を構えていて拍手ができないせいか、終わった後の拍手の音が小さいなど感じる場合があります。人数制限もされていて、それだけでなく観客数が少ないので、ぜひ、演技、競技が終わった瞬間は、割れんばかりの拍手を送ってあげてください。その拍手の音に、子どもたちは「やりきった!」「お家の人が感動してくれた!」と満足感や達成感を味わうことができます。



## 子どもが伸びる、魔法の口ぐせ Part2

先月号で紹介した「子どもが伸びる魔法の口ぐせ」の続きを紹介します。

### 「こうしろ」より、「～するにはどうすればいいか」

しつけには、子どもの気持ちや意思とは別に、親の意思を押しつける要素があるのは確かです。小さい子に挨拶や食事のマナーなどを教えるときは、子どもが嫌がろうが、そのマナーを押しつけることが必要で、これは理屈などという以前の問題です。

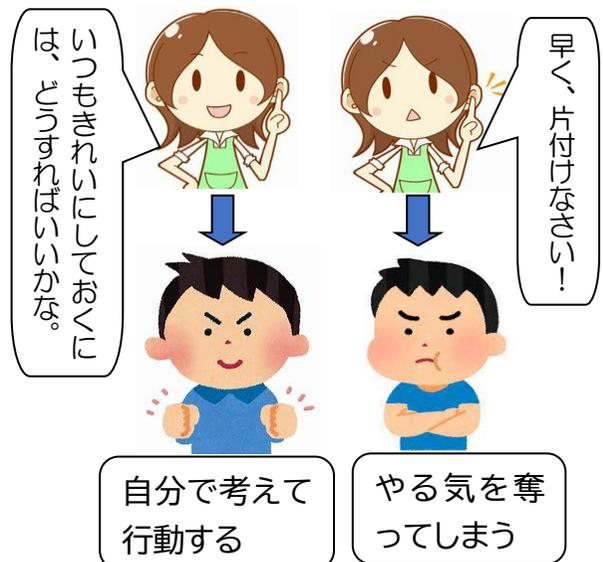
しかし、この押しつけ型のしつけも、子どもの年齢がある程度以上になると、あまり通用しなくなってきます。その目安は、だいたい幼稚園に入る頃と言ってもいいでしょう。

この頃になると、子どもに自我の芽生えが見られるようになり、親の言いつけでも、自分が納得しないことには素直に従わないようになってくるのです。そのため、「あしなさい」「こうしなさい」と、子どもに口うるさく指示するようになりがちです。このような口うるさい指示は、子どものやる気を奪ってしまうことになりかねないのです。

「こうしろ」と指示するのではなく、「○○するには、どうすればよいか」という疑問形でたずねて、子ども自身に考えさせるようにします。そうすれば、「させられる」という強制ではなく、「自分で考え、行動する」ための有効なヒントとして、子どもの頭に抵抗なく入っていきます。

その結果は、もしかすると大人目からは十分に満足できないものに終わるかもしれませんが、少なくとも、子どもが自らの意志で自発的に物事を処理する能力は、こちらの方が、はるかに引き出せるはずで

#### 子どもに何かを命じるときは…



# 人のせいにする子には、「あの子ならどう言うか」

何か問題が起きたときに、外に責任を転嫁させるタイプの人間が増えてきているようです。本来、個人の責任である事柄まで、例えば「政治のせいだ」とか「社会が悪いからだ」などと、ほかのところに責任転嫁してしまうタイプが多いのです。こんな風潮が支配的になれば、子どもに与える影響も計り知れないほど大きいものです。

社会性が身についていない子どもは、もともと自己中心的な存在です。自分を客観視できないので、何かとトラブルを起こし、それを叱っても、「〇〇さんのせいだよ。」と言い逃れしよとするものです。そのような言い逃れを許さないことがしつけの基本ですが、ただ口うるさく叱っても効果は薄いでしょう。

相手に原因をすべて押しつけて言い逃れをしようとする子どもには、どこまでが自分の責任で、残りのどれくらいが相手の責任かを客観的に理解させることが第一です。自分とは、別の立場があることを、自分の頭で考えさせる必要があるわけです。

もっとも効果的な方法は、子どもが「あの子のせいだから、ぼくには関係ない。」と主張したときに、「あの子ならどう言うだろう」と切り返すことです。子どもは、自分なりに頭の中で、相手がどう言うか考え始めるはずで、この立場を変えたロール・プレイング（役割演技）によって、子どもは、何パーセントかは自分の責任であることに気づき、全責任を相手になすりつけた自分を反省します。

こうして、子どもの時から、冷静に相手の立場を分析することをすれば、バランスのとれた性格の人間に成長するでしょう。自分の責任を自覚し、しかも相手に思いやりを忘れない人間は、たとえ思い通りにいかない事態に直面しても、決してくじけないパーソナリティの持ち主になれるでしょう。

## 引っ込み思案の子には、「失敗してもいい」

“引っ込み思案の子”は、決して“やる気のない子”ではありません。ただ、「これをやると叱られるのではないか」「こうすと失敗するのではないか」と失敗することを恐れているだけなのです。“やりたい”気持ちがあっても先読みしてしまい、結局行動に移せないのが実状です。いくら励ましても、叱っても、子どもの引っ込み思案は直せません。引っ込み思案になった原因を取り除かなければ、子どもの気持ちは前には向かないのです。まずは、「失敗はしていいのだ」と教えることから始めることです。そうすることによって、次第に失敗を恐れなくなるはずで

